

日本の小学生の英語に対する 動機・態度と英語の熟達度との関係

—児童英検参加者の分析を通して—

東京都／東京未来大学 専任講師 カレイラ 松崎 順子

申請時：東京都／津田塾大学大学院在籍

概要

本研究の目的は、英語学習にとって重要な要因である内的動機づけ、道具的動機づけ、外国に対する興味、不安、親の励ましに注目し、これらの情意要因と英語の熟達度の関係を調べていくことにある。本研究に参加したのは2006年10月に実施された児童英検を受験した小学校3年生から5年生の児童80名である。児童英検のグレード別に情意要因と児童英検の正答率の関係を調べた結果、最も難易度の高い GOLD でのみ、内的動機づけ、道具的動機づけが正答率と弱い正の相関を示し、不安は弱い負の相関を示した。なお、BRONZE と SILVER ではそのような相関は認められず、親の励ましと弱い負の相関が見られた。すなわち、最も難易度の高い GOLD を受験した児童においてのみ情意要因と英語の熟達度が関係していたことから、学習歴が長くなるほど情意要因が英語の熟達度に影響を与える傾向があると考えられる。

2005-6, 2006)。しかし、小学校での英語の必修化が検討され始めた昨今、小学校英語教育においても評価というものに本格的に取り組んでいかなければならない時期にきたと思われる。

一方、第2言語教育や外国語教育において動機や不安などの情意要因は熟達度に影響を与えるということは言われており、中学生・高校生・大学生などを対象に研究が行われてきた (e.g., Yamato, 2002; Yashima, 2000; Aida, 1994)。しかし、小学生を対象にした情意要因と熟達度の研究 (e.g., バトラー・武内, 2006; Kiss & Nikolov, 2005) というものはまだ少なく、小学生の英語の熟達度を上げるためには、情意要因と熟達度の関係というものを明らかにしていく必要があると思われる。ゆえに、本研究では小学生の英語学習にとって重要な要因である英語が好きだから勉強するという内的動機づけ、仕事や受験のために英語を学習するという道具的動機づけ、その他外国に対する興味、不安、親の励ましに注目し、これらの要因と英語の熟達度の関係を調べていく。

1 はじめに

文部科学省 (2006) の報告によると、2005年度には、日本全国の小学校の93.6%において英語活動が実施されていると言われている。公的なカリキュラムや評価の基準などがはっきり定まっていないため、各小学校により活動内容や評価の基準が異なる。また、現在行われている小学校の英語活動は、児童の英語力をいかにして高めるかということよりも、いかに児童を楽しませて英語を教えるかということに重点が置かれてきたため、小学生を対象に行った評価に関する研究はまだ少ない (バトラー・武内,

2 先行研究

2.1 小学校英語教育における評価に関する研究

現在まで小学校英語教育において評価に関する研究は樋口他 (1989-90, 1990-1, 1991-2, 1992-3)、高田 (2003)、バトラー・武内 (2005-6, 2006) によって行われてきた。樋口他と高田によって行われた研究は小学校で英語活動を経験した児童と経験していない児童の英語の熟達度を比較した研究である。ゆ

えに、それらの研究では小学生ではなく中学生や高校生が対象になっている。先駆的な研究として JASTEC 言語習得プロジェクトチーム（樋口他）による研究が挙げられる。彼らは学習開始年齢と英語の熟達度の関係を調べ、リスニング・スピーキング・ライティングの技能において早期に英語の学習を開始した児童の方が英語の熟達度は高かったと報告している。一方、高田（2003）は中学1年生を小学校での英語活動の経験者と未経験者に分けて、1学期と3学期に彼らの英語の熟達度を調査した。その結果、語彙・文法において両グループに有意な差は見られなかった。このように異なる結果が現れているのは、サンプリングや測定の方法の違い、小・中学校でのカリキュラムが一貫していないためであるとバトラー（2005）は指摘している。

一方、純粋に小学生を対象にした研究では、バトラー・武内（2005-6, 2006）が挙げられる。バトラー・武内（2005-6）は小学生5,087名を対象に児童用の英語テスト、「日本英語検定協会主催 児童英検」（以下、「児童英検」と呼ぶ）の BRONZE（BRONZE についての説明は3.3.1を参照）を使用して調査を行った。その結果、長く英語活動を行ってきたクラスや文字や書き言葉を導入しているクラスに在籍する児童の方が BRONZE の正答率が高かったと報告しているが、BRONZE ではテストのレベルが全体的に易しすぎたため、児童のパフォーマンスを正確に測りきれていなかったとも述べている。そのため、バトラー・武内（2006）では BRONZE より難易度がやや高い SILVER（3.3.1を参照）を用いて調査を行い、その結果、学年が上がるにつれて正答率が上昇しており、特に文字の学習に関してはその差が顕著であった。なお、英語活動への態度や動機づけは SILVER の正答率にあまり影響を与えていなかった。

2.2 小学校英語教育における情意要因に関する研究

日本の小学校英語教育において情意要因に関する研究はいくつか（e.g., Carreira, 2005-6, 2006; 國本, 2004-5, 2005-6; 松宮, 2004-5, 2005-6）行われている。Carreira（2006）は、小学生の英語学習に対する情意要因（内的動機づけ、道具的動機づけ、外国に対する興味、不安、親の励まし）を測定する質問紙 Motivation and Attitudes Toward Learning

English Scale for Children（MALESC）を作成し、Carreira（2005-6）では英語学習に対する情意要因の発達の傾向を調べ、学年が上がるにつれて、内的動機づけ、外国に対する興味、道具的動機づけが低下することを明らかにした。國本（2004-5）は英語が好きな児童はコミュニケーション意欲と自己評価が高くなる傾向があることを示し、國本（2005-6）では英語が好きな児童は学習意欲が高い傾向があるが、一方でプレッシャーを感じやすく不安を感じやすいということを明らかにした。また、松宮（2004-5）は不安について調査を行い、児童の半数以上が英語活動について何らかの不安を感じているということを明らかにした。松宮（2005-6）では英語活動をいくつかのタイプに分け、個々の英語活動に対する好意と不安との関係を調べ、不安を強く感じている児童は自分一人で発言する活動を嫌う傾向があることを示した。

3 本研究

3.1 目的

日本の小学校英語教育における評価や情意要因に関する研究を概観してきたが、熟達度と情意要因の関係性を調べた研究は少ない。一般的に、言語学習に対する動機づけは熟達度にプラスに働き（e.g., Yamato, 2002; Yashima, 2000）、不安は熟達度にマイナスに働く（e.g., Aida, 1994）と言われている。また、Koizumi & Matsuo（1993）は親の励ましを感じていない児童ほど英語の熟達度が低いことを明らかにした。これらの研究対象者は中学生以上であり、果たしてこれらの結果が日本の小学生においても当てはまるのであろうか。以上を踏まえ、本研究では以下のリサーチ・クエスチョンを立てて日本の小学生の情意要因と英語の熟達度との関係を検討していく。

1. 小学生の英語学習において動機づけや外国に対する興味は英語の熟達度とどのような関係があるのか。また、その関係は受験したテストの難易度により異なるのか。
2. 小学生の英語学習において不安は英語の熟達度とどのような関係があるのか。また、その関係は受験したテストの難易度により異なるのか。

3. 小学生の英語学習において親の励ましは英語の熟達度とどのような関係があるのか。また、その関係は受験したテストの難易度により異なるのか。

3.2 調査対象者

本研究に参加したのは2006年10月に実施した児童英検を受験した神奈川県郊外の私立K小学校の3年から5年の児童80名（男子20名・女子60名：3年生29名・4年生21名・5年生30名）である。K小学校では小学1年から週に1回の英語の授業が行われており、児童英検は平成15年度から学校で実施している。

3.3 調査内容

3.3.1 児童英検

本研究では英語の熟達度を測るため児童英検を使用した。児童英検は現在行われている小学校の「総合的な学習の時間」での英語活動を考慮に入れて作成されているテストであり（日本英語検定協会, 2005）、日本の小学校の英語教育の事情に最も適したテストであると考えられている。テストの結果は「正答率」によって評価されているため、全問正解すると100%となる。英語学習の入門期にはリスニング力を高めることが大切であることから、児童英検ではリスニング形式のテストを採用している（日本英語検定協会, 2005）。テストはBRONZE・SILVER・GOLDの3つのグレードに分かれており、GOLDが最もレベルが高い。以下に各グレードの特徴を述べる（日本英語検定協会, 2005）。

BRONZE

児童英検を初めて受験し、小学校の英語活動であるなら1年半から2年以上の学習経験を持つ児童が対象である。テスト時間は約30分である。以下はBRONZEの到達目標と出題のねらいである（日本英語検定協会, 2005, p.6）。

[到達目標]

1. 英語の音やリズムに慣れ親しむ。
2. 初歩的なコミュニケーションに必要な語句や簡単な表現を聞き、理解する。

[出題のねらい]

- 語句 定型表現や基本文中の名詞、形容詞、動詞の聞きとり
- 会話 あいさつや動詞を含んだ初歩的な会話（1

往復）の聞きとり

文章 簡単に短い1文の聞きとり

SILVER

BRONZEを受験して80%以上の問題に正答でき、小学校英語活動であるなら、2年半～3年半以上の学習経験を持つ児童が対象である。テスト時間は約35分である。以下はSILVERの到達目標と出題のねらいである（日本英語検定協会, 2005, p.8）。

[到達目標]

1. 日常生活での身近な事柄に関する簡単な語句や表現を聞き、理解する。また、それに対して簡単に応答する。
2. 簡単な会話や文をいくつか聞き、その中にある情報を理解する。

[出題のねらい]

- 語句 定型表現や基本文中の前置詞の聞きとり、いろいろな文の中の名詞、形容詞、動詞の聞きとり、カテゴリー別複数単語の聞きとり
- 会話 話しかけに対する応答選択や簡単に短い会話（2～3往復）の聞きとり
- 文章 簡単に短い文章（2～3文）の聞き取り・否定文や疑問文の聞きとりと応答
- 文字 アルファベットと音声の結びつき・簡単に短い単語の認識

GOLD

SILVERを受験し80%以上の問題に正答でき、小学校の英語活動などで4～5年以上の学習経験を持つ児童が対象である。テスト時間は約45分である。以下はGOLDの到達目標と出題のねらいである（日本英語検定協会, 2005, p.10）。

[到達目標]

1. 日常生活での身近な事柄に関する語句や表現を聞き理解する。またそれに対して質問したり応答したりする。
2. まとまった会話や文章を聞き、その中の情報を理解すると同時に、その場面状況を判断したり要旨などを把握したりする。

[出題のねらい]

- 語句 いろいろな文の中での語句の聞きとり
- 会話 簡単にまとまった会話（3往復以上）の聞きとり

文章 つながりのある複数の文（3文以上）の間
きとり，5W1Hによる疑問文の応答・質問
文の投げかけ

文字 基本的な語句や簡単に短い文の認識

3.3.2 質問紙

英語学習に対する情意要因を調べるため，MALESCを使用した（資料参照）。MALESCはCarreira（2006）が作成したもので，19の項目から成り，「はい」（4点）から「いいえ」（1点）の4件法を採用している。「内的動機づけ」，「外国に対する興味」，「道具的動機づけ」，「親の励まし」，「不安」の5つの下位尺度から構成されており，各下位尺度のCronbachの信頼性係数 α は.65から.86（Carreira）であり，各下位尺度の信頼性係数はほぼ満足できる水準と見なせる。本研究ではピアソンの相関関係によって，MALESC上の要因（「外国に対する興味」，「内的動機づけ」，「道具的動機づけ」，「親の励まし」，「不安」）と児童英検の正答率の関係を調べた。

3.3.3 手続き

調査対象者の児童に対して，MALESC（Carreira，2006）を小学校教員の監督のもとに実施した。なお，調査に際し，あらかじめ調査の趣旨を文書および口頭で説明し，調査を行う小学校より同意書を得た。また，質問紙に関する指示は著者がカセットテープに吹き込み，本調査は大学での研究の一環であり，成績などには一切関係ないことを伝えた。小学校の教員が回収した質問紙に各児童の児童英検の正答率を記載した。なお，児童は児童英検を2006年10月に受験し，2006年11月に質問紙に回答した。

4 結果

80名の児童のうち，BRONZEを受験した児童が37名，SILVERが32名，GOLDが11名であった。児童英検の各グレードを受験した学年の児童数は表1に示した。また，各グレード別の記述統計（最大値，最小値，平均値，標準偏差）の結果は表2のとおりである。

■ 表1：児童英検のグレード別・学年別の児童数

児童英検の グレード	3年	4年	5年	合計
BRONZE	26	9	2	37
SILVER	3	11	18	32
GOLD	0	1	10	11
合計	29	21	30	80

■ 表2：グレード別の児童英検の正答率の記述統計

	最小値	最大値	平均値	標準偏差
BRONZE	71	97	86.70	7.89
SILVER	62	92	80.19	7.06
GOLD	68	96	82.18	9.31

本研究 MALESC の下位尺度（「内的動機づけ」，「外国に対する興味」，「道具的動機づけ」，「親の励まし」，「不安」）の α 係数は，それぞれ .89，.86，.85，.71，.55であり，不安の下位尺度を除いて高い信頼性を有していると言える。

MALESC の下位尺度の平均点と標準偏差及び児童英検の正答率との相関係数を各グレード別（BRONZE，SILVER，GOLD）に表3，表4，表5に示した。BRONZEを受験した児童はどの下位尺度も統計上有意ではなかったが，「親の励まし」（ $r = -.33$ ）において弱い負の相関が見られた。SILVERを受験した児童においても同様にすべての下位尺度が統計上有意ではなかったが，「親の励まし」（ $r = -.33$ ）において弱い負の相関が見られた。一方，GOLDを受験した児童も同様にどの下位尺度も統計上有意ではなかったが，「内的動機づけ」（ $r = .34$ ），「道具的動機づけ」（ $r = .43$ ）において弱い正の相関が見られ，「不安」において弱い負の相関（ $r = -.35$ ）が認められた。

5 考察

グレード別に情意要因と児童英検の正答率との関係を調べた結果，どの下位尺度も統計上有意な相関は認められなかった。しかし，中には相関係数が.30以上のものもあり，全く相関がないとは言えないと判断し，以下では相関係数.30以上の関係を弱い相関と見なして考察を行う。

■ 表 3：BRONZE を受験した児童の MALESC の下位尺度の平均点と標準偏差及び児童英検の正答率との相関係数

下位尺度	平均	標準偏差	児童英検の正答率との相関係数
内的動機づけ	3.24	0.67	-.22
外国に対する興味	3.38	0.81	-.11
道具的動機づけ	3.16	0.78	-.25
親の励まし	2.81	0.82	-.33
不安	2.58	0.83	-.14

■ 表 4：SILVER を受験した児童の MALESC の下位尺度の平均点と標準偏差及び児童英検の正答率との相関係数

下位尺度	平均	標準偏差	児童英検の正答率との相関係数
内的動機づけ	3.49	0.73	-.19
外国に対する興味	3.48	0.61	-.15
道具的動機づけ	3.61	0.62	-.16
親の励まし	3.23	0.69	-.33
不安	2.19	0.82	.00

■ 表 5：GOLD を受験した児童の MALESC の下位尺度の平均点と標準偏差及び児童英検の正答率との相関係数

下位尺度	平均	標準偏差	児童英検の正答率との相関係数
内的動機づけ	3.14	0.88	.34
外国に対する興味	3.53	0.76	.24
道具的動機づけ	3.64	0.48	.43
親の励まし	3.24	0.42	-.11
不安	2.21	0.67	-.35

5.1 リサーチ・クエスチョン 1

小学生の英語学習において動機づけや外国に対する興味は英語の熟達度とどのような関係があるのか。また、その関係は受験したテストの難易度により異なるのか。

表 3 および表 4 から明らかなように BRONZE と SILVER を受験した児童は、「内的動機づけ」、「道具的動機づけ」、「外国に対する興味」と児童英検の正答率との間には相関はほとんど認められなかった。一方、GOLD（表 5）においては、「内的動機づけ」、「道具的動機づけ」が児童英検の正答率と弱い正の相関を示していた。難易度の高いテストを受験している児童は、Yamato（2002）と Yashima（2000）と同様に、英語学習に対する動機づけが高いと英語の熟達度が高くなる傾向があると言えるであろう。ただし、英語の熟達度が高いために動機づけが高くなるとも考えられる。

5.2 リサーチ・クエスチョン 2

小学生の英語学習において不安は英語の熟達度とどのような関係があるのか。また、その関係は受験したテストの難易度により異なるのか。

BRONZE と SILVER において「不安」と児童英検の正答率の相関関係は見られなかった。一方、GOLD においてのみ、弱い負の相関が認められた。これらのことから、難易度の高いテストを受験している児童は、不安を強く感じると英語の熟達度が低くなる傾向があることが明らかになった。すなわち、難易度が高い GOLD を受験している児童においてのみ Aida（1994）と同様に不安が言語学習の熟達度にマイナスの影響を与えていると言える。しかし、これはかなり弱い相関であるため、このような結論を出すにはさらなる研究が必要であると思われる。

5.3 リサーチ・クエスチョン3

小学生の英語学習において親の励ましは英語の熟達度とどのような関係があるのか。また、その関係は受験したテストの難易度により異なるのか。

BRONZE と SILVER において「親の励まし」は児童英検の正答率と弱い負の相関を示したが、GOLD では相関は見られなかった。これらのことから、難易度の低いテストを受験した児童においてのみ親の励ましを感じている児童は英語の熟達度が低い傾向にあった。なお、本研究の結果はかなり弱い相関であるため、これらの結果は慎重に解釈しなければならない。

5.4 全体の考察

最も難易度の高いテスト GOLD を受験した児童のみ動機づけと不安が英語の熟達度に関係しており、BRONZE と SILVER ではそのような関係は認められなかった。ゆえに、小学生の英語学習において情意要因が英語の熟達度に影響を与えるということは本研究からだけでは結論づけることはできない。

ではなぜ、このように受験するテストの難易度により情意要因と英語の熟達度の関係に違いが現れたのであろうか。まず第1に推測できることは、BRONZE の正答率の平均が86.70とかなり高く、テストが易すぎため（バトラー・武内, 2005-6）、動機づけや不安などの情意要因が正答率に影響を与えなかったのではないかと考えられる。一方、SILVER (80.19) の正答率の平均は GOLD (82.18) より低い、文字に関する出題内容に関して SILVER ではアルファベットと音声の結び付き・簡単な単語の認識程度であったのに対し、GOLD では基本的な語句や短い文の認識なども行うなどかなり高度な問題が出題されている。文字に関する出題の有無や問題形式が今回の結果に影響したとも考えられる。

第2に、表1で明らかのように、GOLD を受験した児童のほとんどが5年生であることから、これらの結果が受験したテストの難易度によるものなのかそれとも学年の違いによるものなのかは明らかではない。つまり、テストの難易度とは関係なく、学年が上がるほど情意要因が熟達度に影響を与えるとも推測できる。

また、最も難易度の高い GOLD においてのみ動機づけや不安の情意要因と熟達度が相関を示していたことから、学習歴が長くなるほど情意要因が英語の

熟達度に影響を与える傾向があるとも解釈できる。ゆえに、児童の英語学習が進めば進むほど、教師側は児童の英語学習に対する意欲を高めることができるように配慮し、将来英語がどのような場面でなぜ必要かなどを説明すると同時に、不安をなるべく感じないような授業の工夫をしていく必要があると思われる。

6 本研究の限界と今後の課題

最後に本研究の限界と今後の課題について言及する。第1に、どの下位尺度も正答率との関係において統計上有意な関係は認められなかった。このため、本研究から情意要因と熟達度の関係においてははっきりした関係があるとは言えない。しかし、これは人数が少ないためであり、調査対象者を増やすならば、統計上有意になるとも考えられる。ゆえに、今後はより多くの児童を対象にした研究が必要である。第2に、本研究ではあくまでも情意要因と英語の熟達度の相関関係を調べた研究であり、因果関係ではない。ゆえに、その結果の解釈には十分な注意が必要である。第3に、本研究ではすでに児童英検を実施している小学校において研究を行った。児童が各自受験したいグレードのテストを受験したため、その人数にばらつきがあり、学年差や男女差の違いを正確に調べるだけの十分な人数が確保できなかった。

以上のような限界はあるが、本研究は日本の小学生の情意要因と英語の熟達度を調べた先駆的な研究であり、小学校英語教育に有益な示唆を与えるものと思われる。最も難易度の高い GOLD を受験した児童において情意要因と英語の熟達度が関係していたことから、学習歴が長くなるほど情意要因が英語の熟達度に影響を与える傾向があるとも考えられる。ゆえに、教師側は児童の英語学習が進めば進むほど、より一層彼らの学習意欲を高め、不安をあまり感じないような授業の工夫をしていく必要があるであろう。

小学校英語教育に関する研究、特に、評価に関する研究は始まったばかりである。今後は、情意要因だけでなく社会的文化的要因などさまざまな角度より小学生の英語の熟達度を調べていく必要があると思われる。

謝 辞

最後に本研究の機会を与えてくださった(財)日本英語検定協会の皆様、選考委員の先生方、とりわけ貴重なご助言・ご指導をいただいた大友賢二先生に心より感謝を申し上げます。また、小学校を探し

紹介して下さった児童英検担当の染谷有美様及び児童英検の資料を提供して下さり貴重な助言をくださった調査研究課の前田かおり様に心よりお礼を申し上げます。最後に本研究に参加して下さった先生方と生徒の皆様心に感謝いたします。

参考文献 (*は引用文献)

- *Aida, Y.(1994). Examination of Horowitz, Horowitz, and Cope's construct of foreign language anxiety: The case of students of Japanese. *Modern Language Journal*, 78, 155-68.
- *バトラー後藤裕子.(2005).『日本の小学校英語を考えるアジアの視点からの検証と提言』. 東京: 三省堂.
- *バトラー後藤裕子・武内麻子.(2005-6).「小学校英語活動における評価: 児童英検(BRONZE)を使った試み」.『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』第25号, 1-15.
- *バトラー後藤裕子・武内麻子.(2006).「小学校英語活動における指導とコミュニケーション能力: 児童英検シルバーによる調査」. *STEP BULLETIN*, vol.18, 248-263.
- *Carreira, M.J.(2005-6). Developmental trends and gender differences in affective variables influencing English as a foreign language learning among Japanese elementary school pupils, *JASTEC*, 25, 57-74.
- *Carreira, M.J.(2006). Motivation for Learning English as a Foreign Language in Japanese Elementary Schools, *JALT Journal*, 28, 135-157.
- *樋口忠彦・守屋雅博・國方太司・三浦一郎・北村豊太郎・中本幹子他.(1989-90).「学習開始年齢が言語習得に及ぼす影響—第Ⅰ報」.『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』第9号, 3-19.
- *樋口忠彦・國方太司・守屋雅博・三浦一郎・北村豊太郎・中本幹子.(1990-1).「学習開始年齢が言語習得に及ぼす影響—第Ⅱ報」.『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』第10号, 15-35.
- *樋口忠彦・三浦一郎・國方太司・北村豊太郎・中本幹子・守屋雅博.(1991-2).「学習開始年齢が言語習得に及ぼす影響—第Ⅲ報」.『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』第11号, 3-20.
- *樋口忠彦・國方太司・三浦一郎・北村豊太郎・中本幹子・守屋雅博.(1992-3).「学習開始年齢が言語習得に及ぼす影響—第Ⅳ報」.『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』第12号, 27-37.
- *Kiss, C., & Nikolov, M.(2005). Developing, piloting, and validating an instrument to measure young learners' aptitude. *Language Learning*, 55, 99-150.
- *Koizumi, R., & Matsuo, K.(1993). A longitudinal study of attitudes and motivation in learning English among Japanese seventh-grade students. *Japanese Psychological Research*, 35, 1-11.
- *國本和恵.(2004-5).「小学4年生英語学習者の心理要因に関する研究」.『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』第24号, 41-55.
- *國本和恵.(2005-6).「英語への好感度が小学4・5年の英語学習動機づけに及ぼす影響」.『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』第25号, 75-87.
- *松宮奈賀子.(2004-5).「児童が不安を感じる英語活動場面とその要因の模索」.『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』第24号, 57-69.
- *松宮奈賀子.(2005-6).「児童が好む活動に関する意識調査: 不安の強さに焦点をあてて」.『日本児童英語教育学会(JASTEC)研究紀要』第25号, 89-106.
- *文部科学省.(2006).「『小学校英語活動実施状況調査』について」.
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/03/06031408/001.htm(2007年1月18日取得).
- *日本英語検定協会.(2005).『児童英検テスト内容ハンドブック』. 東京: 財団法人日本英語検定協会. 第3版.
- *高田智子.(2003).「早期英語教育経験者と未経験者の中間言語の分析」. *STEP BULLETIN*, vol.15, 159-170.
- *Yamato, R.(2002). A study on motivation and strategies in an EFL setting. *JACET Bulletin*, 35, 1-13.
- *Yashima, T.(2000). Orientations and motivation in foreign language learning: A study of Japanese college students. *JACET Bulletin*, 32, 121-133.

資料：Motivation and Attitudes toward Learning English Scale for Children (MALESC) ●●●●●●●●●●

内的動機づけ

1. 英語の授業はとてもたのしいです。
3. 英語の授業のある日は楽しみです。
6. 習った英語をもっと使ってみたいです。
8. もっと英語の授業があったほうがいいです。

外国に対する興味

2. いろいろな外国にいてみたいです。
4. 外国のお友達をたくさん作りたいたいです。
12. 英語が上手になって外国の人と話してみたいです。
15. 外国に住んでみたいです。
17. 外国のことをもっと知りたいです。

道具的動機づけ

7. 中学校に入って英語の勉強で困らないように勉強します。
11. 大人になったら自分にとって必要になると思うので、英語を勉強します。
14. 将来やりたい仕事のために英語を勉強します。
19. 高校や大学に入るために必要なので英語を勉強します。

親の励まし

9. おうちの人は英語がとても大切だと思っています。
13. おうちの人は私が英語ができるようになることを望んでいます。
18. おうちの人は英語を一生懸命勉強しなさいといいます。

不安

5. 英語の授業でみんなよりできないと心配です。
10. 英語の授業中はなんとなくいつも心配です。
16. 英語の授業で答えたり、発表するときどきどきします。